
我 求むるは

彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我 求むるは

【Nコード】

N0937BA

【作者名】

彼方

【あらすじ】

記憶喪失の少年執事とその主であるお嬢様、そして彼らの愉快な仲間たちによるマジックファンタジー！！

少年は記憶を取り戻すことができるのか



処女作なため、文章も拙く至らぬところが多いと思いますが、よろしくお願いいたします。

尚、不定期更新ですのでお気を付けください。

(少なくとも週一は更新する予定です)

プロローグ（前書き）

世界観などにつきましても、話を進める中で説明していく予定です

プロローグ

またか……………。

そう思うほど、最近見慣れた景色が目の前に広がっていた。周りは仄暗く静寂に包まれており、目を凝らしてみると壊れた建物の残骸がそこらにたくさん転がっている。そこは最近よく見る夢の中であつた。

自分の意思で体を動かすことができず、いつもよりも低い視線で動き回る世界をただ見ているだけの夢。できるだけ見たくない哀しい夢。そして……………“失くした記憶”を取り戻すために、とても重要な夢。

そんな夢の主　　おそらく幼い頃の自分　　は、ひたすら走っている。手に息絶えた動物を持っていることから、狩りか何かに出かけていたのだろう。しかし帰ってきた街の豹変ぶりから急いでいる、といったところだろうか……………。そしてこの幼い自分が向かっているのはおそらく両親のところ。

しかし、今までの夢通りならその先には

「ッ!? 馬鹿、こつちに来るな!

逃げろ!」

最初に視界に入ったのは、赤い翼が生えている男と剣で鏝迫り合いをしながら幼い自分に向って叫ぶ父親らしき大柄な男。

そしてその後ろに倒れ、腹から血を流している母親と思われる女性。そしてその周りに倒れている、急所から血を垂れ流した者たち。おそらくすでに息絶えている。

幼い自分は状況がうまく理解できずに茫然と立ち尽くしている。手からもせつかく狩った獲物が落ちているのに、それにさえ気づいていない。

そこに相手を吹き飛ばした父親らしき人物が駆け寄ってきた。

「……とーさま? なんでおかーさまもみんなも、こんなところでねてるの……?」

おそらく現状を理解できたはいいものの、それを認めたくないのだろう。

視界は霞み、声変わりをまだしていない声で父に尋ねるも、その声は明らかに震えていた。

「……お前は逃げなさい。ここには
ッ!?
そ!」

あふれる感情を抑えるようにして話していた父がなにかに気づき、幼い自分を強く抱きしめ蹲った。その瞬間、大きな爆発音とともに周りの景色が赤く染まり、肉の焼ける臭いが目の前から漂ってくる。

「・・・これでも生きいるのか。私が見える中で最も強い魔法だったんだがな。さすが、とでもいったところか？」

そう言いながら、父に吹き飛ばされた男がこちらに歩いてきた。しかしその姿は最初に見たときと違い、全身に切り傷があり片翼は切り飛ばされたのか無くなっている。

「しかし、全力で魔力を練ったのだ。貴殿でもさすがに動くのは辛かろう？安心しろ、親子ともに殺してやる。・・・逃がしなごせんよ。」

「・・・」

何か思うところがあつたのか、最後だけ語気を強くして片翼の男は語る。

男が言っている通りなのか、その言葉に何の反応も返さずに父は自分を抱きしめ蹲ったままなかなか動かない。その背中からは煙が出ており、炭化してしまっているのか黒く変色している。

しかしその腕の中にいる自分には、父が詠唱している声がきこえていた。

「我等を守りたまえ、【守護壁・極】」

詠唱が完成するとともに父と自分を囲むようにして現れる半円型の金色の壁。

形成している最中に、驚愕と焦燥を浮かべた表情でこちらを見ていた片翼の男がこちらに駆けてきているのが見えたが、今は見えない。

「……………」

自分の名前が呼ばれたことよって、視線が金色の壁から移る。その先にあつたのは、今は血や土で汚れているが元は美しかったであろうプラチナブロンドと空色の虹彩の瞳をもつ端正な顔であった。

「……………、これを持ってなさい。これがいつかお前を助けてくれるだろうから……………」

毎回なぜだか自分の名前の部分だけはノイズのようなものが入り、聞き取ることができない。どんなに耳を傾けても、どんなに知りたいたと望んでも、自分の名前を知ることができないのだ。そんなことを意識だけで何もできない自分が考えているうちに、幼い自分はその小さな手で、父からの“最後の贈り物”を受け取った。

手元に向いていた視線が前に戻ったとき、その瞳には

っていた。

崩れ落ちる金色の壁と、空を舞う父の首が映

プロローグ（後書き）

感想お待ちしております。

批判などにつきましては……お手柔らかにお願いします（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0937ba/>

我 求むるは

2012年1月2日02時51分発行